

信仰の説明責任

藤 枝 真

説明責任とは、何らかの行為、存在について問われたとき、その妥当性や理由の説明を提示する責任である。Verantwortung/antworten や responsibility/respond という語において示されているように、責任には「応答する」という意味が含まれている。

つまり信仰の説明責任とは、信仰に関して何らかの問いが発せられた場合、その問いに対して十分な応答となるような説明をする責任を指す。この責任についてここでは『創世記』におけるアブラハムのイサク奉獻の物語を例にとって論じる。神はアブラハムの信仰を試すために、彼の息子イサクを捧げよという命令を下す。アブラハムはこの神の命令を他の誰にも伝えることなく、イサクを殺して神に捧げようとするが、まさに手を下す瞬間に、神が送った使いによってアブラハムは制止され、神はアブラハムの信仰を認める。この物語について、キエルケゴールは、「アブラハムのなしたことは、倫理的に表現すれば、彼はイサクを殺そうとしたのであり、宗教的に表現すれば、彼はイサクを捧げようとしたのである」(EBr, 26) と重層的に評価する。アブラハムは、神が命じた行為に対しておそらく起こりうるであろう非難や反論に対して十分な説明を為す責任を負うべきではないのか。

I 「キリスト教の真理をただ確実で明らかなものとしてくれるなら、私はそれを受け入れるつもりは充分にある。これはあたりまえのことだ」(AE, 4)。何かにについて知るといふ行為を正当

なものとするためには、その知識は正当な根拠を持つていなければならない、という基礎づけ主義的な考え方をするならば、信仰についても十分な説明が為されなければならないことになる。このような考えがある一方、宗教や一連の信念体系を一種の言語ゲームとして理解し、そこで使用される言語の文法はそれ自体で独立した一つのゲームに似た体系を形成している、と考える向きがある。このようなウイトゲンシュタイン・フィデイズムにおいては、ある事柄が間違いであるかどうかについて、それは「ある特定の体系の中では」間違いである、と言うことが出来る。別の体系においてはそれは間違いではない、と考えられるのである。しかし、言語ゲームとしての宗教という考えを採用するならば、本論において問題として取り上げたアブラハムのイサク奉獻の物語は、倫理的な概念枠からの問いかけを拒絶してしまうことになる。つまり、このアブラハムのイサク奉獻という行為にキエルケゴールが認めた重層性から、倫理の層を抜き出し、信仰の層だけで独立させてしまうことになるのである。しかし、信仰の説明責任を語る際には、異なる概念枠からの問いかけという重層性にこそ問題が存するのであつて、この重層性を無くすような前に述べた考えを採用することは出来ない。

II 「おそれとおののき」(EBr, 26) において、キエルケゴールは倫理的なものの規定を普遍性と顕在性にと求める。つまりそれは言語による説明可能性と換言出来るものであるが、一般的の言語でアブラハムの行為を語るなら、それは単なる殺人についての説明の域を出ることはない。こうしてアブラハムは沈黙せざるをえず、「彼が沈黙するとき、彼は外部から来るかもしれない論難を無視して、個別者として責任 (Ansvar) を引き受けるのである」

(F.B. 79)。倫理といういわば異種の体系による問いかけに對するアブラハムの応答は、「秘密と沈黙 (Hemmelighed og Tausshed)」(F.B. 80) という形をとる。神との契約を遂行するために沈黙を守り、イサクに手を下そうとする瞬間は愚か (absurd) であるが、普遍性へと還元されない個別者として信仰に向き合う瞬間でもある。キエルケゴールはこれらの矛盾を描き出すことで、アブラハムのイサク奉獻の特異性を強調するが、この著の仮名著作者が「沈黙のヨハネス」であることを思い出しでも分かるように、アブラハムの行為を賞賛はするが推薦しているのでは決していない。キエルケゴールは「おそれとおのき」の冒頭で、この聖書の記述について語り始める前に、アブラハムのこの行為を語る危険性を認識した上で、「いったいアブラハムのことを無条件に語ってよいものであろうか、そんな話し方をしたら、猫も杓子もが思い違いをして、アブラハムのまねをする危険がありはしないだろうか」(F.B. 30) と自問している。アブラハムの物語は、信仰の情熱 (Lidenskab) を讀めるものであると同時に、それはどこまでも倫理的責任に對して沈黙した者の物語でもあるから、この物語はそれゆえに単なる模倣を許すものではない。

III デリダは「死を与える *Donner la mort*」(1992) において、アブラハムのイサク奉獻の物語を「秘密 secret」と「責任 responsibility」という概念から読解を試みている。秘密と責任は、キエルケゴールの書名である「おそれとおのき Frygt og Bæven」と呼応する概念である。この言葉は『新約聖書』「フィリピの信徒への手紙」第一章に見られる言葉であり、そこでは人間がなす行為は我々の意志によるものであり、それ故に人間は

責任を負わねばならないのであるが、その人間の生は見えざる神によって、つまり超越的であり同時に既に人間に内在している神によって規定されている (DM, 82-83)。人間は神と共にありながら神から切り離され、自分の責任を自分で引き受けなければならぬのであり、アブラハムの責任はここに生じる。しかし神と息子イサクという異なる問いかけの仕方をする両者に同時に応答する (repondre) という責任 (responsabilité) は実現不可能である。つまり、キエルケゴールによれば倫理的なものは普遍的なものであるから、普遍的なものとして理解可能な言語に翻訳され、説明が為された信仰は、既に信仰の特異性 (singularté) を失っているのである。神の行為を説明し正当化を試みる神義論 (théodicee) を語りつつ自己の行為を正当化するような「自義論 égodicee」(DM, 90) は、⁴「*ja*」では成立しない。倫理的なもの、頭わになったものとしての外面性は、秘密のもの、語られないものとしての内面性と「共約することが不可能 (incommensurable)」(F.B. 64) なのである。イサクを捧げることを要求し、そしてそれを改めて与え直す構図は、イエスの死と復活という構図に適合する。キエルケゴールはこのような信仰の受け取り直し (反復 Gjentakelse) をキリスト教の根幹の構図として捉えるが、同時にそれは、この根幹構図を受け取ることの困難さも明らかにしている。

注・キエルケゴールの引用は *Søren Kierkegaard Samlede Verker* 第3版を用いた。AE = *Afsluttende Utdenskabning Efterskrift til de filosofiske Smuler*, FB = *Frygt og Bæven* の略記。
Derrida, Jacques, *Donner la mort*, Galilée, 1999 (引用は DM と略記)